

陸自駐屯地紹介シリーズ 第47回

伝統の地に 久居駐屯地

第33普通科連隊他

駐屯地シリーズ編纂委員会

はじめに

陸上自衛隊には同じ地域にあった歩兵連隊の番号と一致する普通科連隊が3コある。公式にはその番号付与に特の意味があつたわけではないとされているが、天の配剤と貴重に感じている向きが少なくない。ご存知の方が多いことを承知の上で列挙したい。その第一は、歩兵第5連隊の番号を引き継いだ青森の第5普通科連隊、第二は静岡城址にあった歩兵第34連隊を継いだ御殿場市板妻駐屯地の第34普通科連隊、第三は三重県一志郡本村に兵営があつた歩兵第33連隊の番号と全く同じ場所を継承して、今は津市久居新町と名を変えた地に駐屯する第33普通科連隊がそれである。陸軍の同番号連隊の跡地そのものにあるこの連隊は、日露戦争で多大な犠牲を払い、レイテで奮戦、砕した歩兵第33連隊の歴史をどのように伝えていくかを目の迫りにしたく、敢えて駐屯地創立記念日の多忙な日に訪問することにした。

三重県点描

県は、紀伊半島の東側に伊勢湾、熊野灘に接する海岸線を持って、北は岐阜県大垣市に接するいなべ市から南は和歌山県新宮市に接する紀宝町まで南北に180kmの細長い県である。県庁所在地は、南北で県のほぼ中央、伊勢湾に面した津市である。この長い県は北から北勢、伊賀、中勢、南勢、東紀州の地域に区分され、それぞれ特色のある地域として名を挙げている。石油コンビナートの煙突が林立する四日市市、サーキットや自動車製造で繁栄している鈴鹿市、忍者の里の物語で脚光を浴びた伊賀市、食通垂涎の牛肉ブランド生産地として知られる松阪市、日本有数の降水量が記録される大台町、皇太后宮が鎮座する伊勢市、真珠生産と観光で知られた鳥羽市と志摩市、多くの台風の度に直撃の映像が日本中に放映される尾鷲市、和歌山県の東部と誤解されやすい熊野市など様々な地名が続いている。

アクセス

東京からは新幹線のぞみで約1時間40分、名古屋で近鉄鳥羽行き又は大阪難波行き特急に乗り換え約40分で津に、更に各駅停車に乗り換え10分で久居駅に着く。指呼の距離に久居駐屯地の5階建ての隊舎が並んで見え、一つの隊舎の壁一杯に精悍な鷲のロゴマークと「陸上自衛隊第33普通科連隊」の文字、もう一つの隊舎には自衛官募集用の壁一杯の自衛官像が描かれていた。

駐屯地創立記念日の前日は激しい雨と風が荒れ狂ってタキシードが出払い、僅かな距離ではあつたがずぶ濡れになりながら駐屯地近くのホテルまで歩いた。駐屯地周辺、演習場を見て廻り更には津市の護國神社参拝の予定は諦めざるを得なかつた。翌日の記念行事が危ぶまれる空模様であつた。

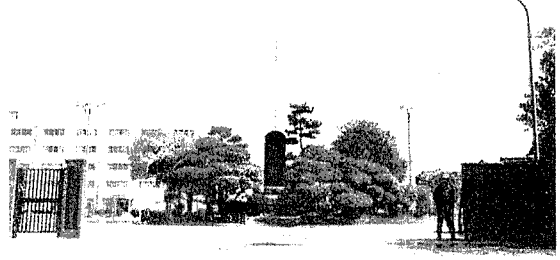
式典の朝

翌朝は青空に変わっていた。開場は9時半からと聞いていたが隊における国旗掲揚の場面に臨みたくて早めに駐屯地に向かった。ほんの短い距離であつたが道筋の其処ここに木の葉ばかりでなく小枝が散乱し、水溜まりにはなおもさざ波が立ち、時にしぶきさえも吹き上がった。

駐屯地は隊舎地区と訓練場地区に分かれ、その間をあまり広くない公道が



明治の正門



平成の正門

走っている。その公道を約100メートル進んだところ、右に訓練場入り口、左に駐屯地入り口がある。まだ開門まで時間があるにも拘わらず場内を覗き込む人々が屯していた。正門左側には警衛所、正面には正門歩哨が立哨し、その後方には低い植え込みに抱かれるようにして巨大な牛が伏せる形の茶色の自然石の碑がある。横書きに刻まれる文字は「誠心」、更にそのすぐ後ろには国旗掲揚柱があった。正門境界に近接しているためその頂点は仰ぎ見なければならず、「聳えている」という感じがする。

国旗掲揚の時刻を聞くと08・15、約20分ある。式典準備作業の様子を取材するため訓練場に入ろうとして警備の隊員に制止された。「未だ開場時間ではない」「場内は作業中で危険である」とのこと、もつともではあったが陸上幕僚長発行之立ち入り許可証、偕行社腕章などを示して取材のためであることと述べ立ち入り承認をお願いしたところ、準備作業に近づかぬよう念を押されて立ち入ることができた。強く舞い上がる砂や水しぶきの中で多くの隊員が観閲式典直前の式場点検、補修に大わらわの姿があった。

やがて国旗掲揚の時刻となった。まず、放送で「本日の国旗掲揚隊員」と「ラッパ手」が紹介された。我々の頃

は「国旗掲揚作業員」と称され警衛隊員の中からの「当番」でしかなかったが、現在は誉れある任務として駐屯地全てに放送されるのである。当然掲揚隊員は身なりを整え端正な掲揚動作を、ラッパ手は音程を外さないように心を込めて国歌譜を吹奏する。国旗が見える場所では敬礼、見えない場所では姿勢を正し、あたりは厳肅な雰囲気配が支配する。強風の中での掲揚とて国旗は一杯に風をはらんで翻り、青い空の中に純白の中の日の丸が浮き上がった。見えた。

掲揚が終わる人々は行動を再開する。開場まで約1時間あったが入門証で隊舎地区にも入れて貰った。正門からのメインストリートは右にややカーブしながら奥に続いている。警衛所を過ぎてすぐ、道路の右側に旧型戦車等が展示され、続いて様式の古い平屋建ての木造建物と説明板があった。「陸軍歩兵第33聯隊本部跡」であるという。歴史的建物として大事にされているらしく、板壁の白い塗装が鮮かであった。その奥に第33普通科連隊本部隊舎が、その玄関口に来賓受付があった。受付は既に始まり、運転手着きの黒い車から降りるフォーマルスーツの人が受け付けを済ませ大輪の花を付けて貰い、隊員の案内を受けて隊舎内に吸い込まれてゆく姿が続いた。駐屯地司令

に祝意を述べる方々か、この日に部隊から感謝状を贈られる人であろうか、応接する司令の忙しさが想像されることであった。

そろそろ公開される史料館拝観の承認を貰い、一人で史料館に向かった。猫の手も借りたい程の忙しさの中、とても案内などお願い出来るものではなかった。幸い所々に立っている警戒任務の隊員は皆丁寧に道を教えてくれた。旧聯隊本部跡の並びに旧将校集会所のやはり白壁の木造建物、更に奥の並びに旧30旅団司令部の建物があり、ここの外壁は白色ではなく年の流れを感じさせる褐色である。玄関外から一見した雰囲気は厳肅であった。心を込めた清掃の跡が感じられ、玄関靴脱ぎには室内用のスリッパが定規を使ったかの様に並べられている。履き替えて入り口で深く一礼、館内に進んだ。

#### 義烈空挺隊長

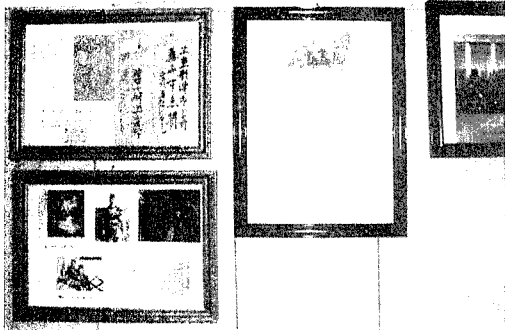
靴脱ぎを一段上がると狭い廊下が直交している。壁際のガラス製書棚の中に20冊程の陸軍関係の書籍が収められ、始どがセピア色に変色して貴重な古書であることを物語っていた。その左上の壁に額に収められた葉書と封筒があった。差し出した方は義烈空挺隊長故奥山道郎陸軍大尉三郎（出撃中に少佐昇任、戦死後に大佐に特進）、

諸賢ご存知の方であり、そのご生家はこの市内であった。お父様宛葉書の文面は「極めて頑健、ご両親様初め皆様のご期待に副う如く努力しておりま

す。ご安心下さい」。お母様宛の封筒もあった。表書きに「遺愛、遺爪在中」、これを受け取ったお母様の切ない思いが感じとれるのではないかと。投函後間もなく沖繩に出撃されたのである。義烈空挺隊については、全日本空挺同志会が、発進地である熊本及び突入地である沖繩において、義烈空挺隊慰霊堂を、毎年実施している由である。又奥山大佐についても、地元三重県空挺支部

が、毎年5月24日に高茶屋墓苑に参拝を実施しているとのことである。津市高茶屋にある奥山大佐の墓苑を心に浮

### 義烈空挺隊



べ、合掌して冥福を祈った。

### 歩兵第33聯隊三軒家の奮戦

この額のすぐ隣に部屋に通じる入り口があり、歩兵第33聯隊を記念する部屋があった。聯隊の誕生地は久居ではなく現在の愛知県名古屋守山区であり、宮中に於ける軍旗拝受は明治31年3月24日であったことが『歩兵第33聯隊史』島田勝巳氏著に記されている。日露戦争では明治37年3月25日、守山から征途について以来、5月25日金州、南山の激戦を初めとして、38年1月26日のからの黒溝台会戦において要衝沈旦堡防御で総司令官より感状を受けるなど奮戦を続けた。奉天会戦では李旦堡付近の三軒家で、圧倒的勢力をもつてする敵に対して、文字通り全滅を覚悟しての攻撃を敢行した。軍旗は隣部隊に預けた上で攻撃敢行、吉岡友愛聯隊長田9期以下殆どが戦死され、戦闘後の残存兵力は集成中隊を編成するのがやっとであったらしい。この地点を抜かれれば日本軍は後方連絡線を遮断され全軍が満州の荒野で餓えと寒さに全滅しかねない地点であり、敵将クロパトキンが大兵力を賭けた一大攻勢であった。我が軍の右翼からの乾坤一擲の作戦が効を奏し苦戦中の軍主力を救い、過敵に反応したクロパトキン將軍麾下ロシア軍は奉天から撤退したが、日本軍が勝利する事が出来たのも33聯

隊のような正面から左翼にかけた第一線の奮闘があったればこそと考える。

昭和8年その時の様子を偲び聯隊の誉れを伝えようと絵画が制作された。この絵画が通った流転の旅は明瞭に記録されている。聯隊の宝として将校集会所に掲げられ尊崇されていた絵画に終戦と共に危機が迫った。焼却命令である。命令を潜って危険を冒し絵画を救った人物がいた。今も三重県にある百五銀行の行員であった橘恒雄氏が密かに講和条約締結まで秘匿した。晴れてこの絵を世に出せる時期になって私すべきものではないと三重県護国神社の社室に納まった。更に昭和44年10月

4日、駐屯地全隊員参列の下に「三軒屋絵画返還式」が挙行され、往時の将校集会所から十数歩の資料館に帰還したのである。それが今日の前にある。筆者はここに伝統の継承を目の当たりを感じ注視し続けた。

### レイテ 軍旗永遠の決別

歩兵第33聯隊にはもう一つ、昭和19年になって圧倒的制空権と制海権を有する米第10軍2コ師団を迎えてレイテ・タクロバンに玉砕した歴史がある。聯隊長鈴木辰之助大佐25期は手元に残った40余人と共に夜襲斬り込みをするに先立ち軍旗奉焼を命じたという。炎を見つめる聯隊長以下残り少な

い將兵の心には、軍旗に対する決別の想いと共に家郷の人々に対する惜別の想いもあったはず、悲しいことに、全員玉砕のためか、戦後聯隊の鎮魂の集まりもささやかであったと伝えられているが、その戦績は郷土資料館に掲げられて、次代を背負う人々に強烈に語りかけている。

### 広報 和やかに

史料館を出て、厚生センターに向かった。1階には売店など厚生関係の各機能が入り、2階は体育館となっている大きな建物である。表口では大変な混雑があった。イラク派遣で脚光を浴びた防弾チョッキや鉄帽等を試着する大人、また幼児向けに縮尺された各種被服が陳列され、幼い子供達が着せて貰ってはしゃいでいた。男の子は陸自迷彩戦闘服を着て仮面ライダーのポーズを決め、女の子はセーラー服を着込んでかわいいVサインをしながら小首をかしげるなど、これを両親達が夢中になってシャッターを押している風景はほのほとした気分を与えてくれた。このコーナーを担当する地方協力本部の西村2尉に募集状況を尋ねて見た。「応募者の確保は今年は難しくない。しかしそれだからこそ後に続く募集協力の態勢造りに力をいれている」との発言があった。



奉焼された栄光の33聯隊旗

## 創立57周年記念式典

式典は激しい風の中、訓練場で晴天行事の観閲式で11時から実施された。式典の執行者・観閲官となるのは陸上

自衛隊第33普通科連隊長兼て久居駐屯地司令下醉尾芳孝1等陸佐陸自86であり、観閲部隊指揮官は副連隊長西津護2等陸佐陸自80である。来賓は野呂昭彦三重県知事、松田尚久津市長、他国会議員、市町議会議員等、また創立記念日に際し駐屯地司令から感謝状を贈られた協力者の方々等多数であった。鉄パイプで作られた観覧席はほぼ埋まっていた。

式典次第の概要をご紹介します。先ず観閲部隊入場、観閲台から遠く離れた位置に待機していた部隊が順に部隊整列位置に入場してくる。その部隊は音楽隊を先頭に第33普通科連隊、今年4月入隊の新隊員教育隊、レンジャー部隊、業務隊、第10後方支援連隊2整備大隊第2普通科支援中隊、第337会計



下醉尾司令の式辞

隊、第306基地通信中隊久居派遣隊であり、その後方には多数の各種車両が整列している。

## 観閲部隊指揮官入場

## 観閲部隊指揮官に敬礼

部隊の整列が終わる駐屯地方向から観閲部隊指揮官が4名の観閲部隊幕僚を従え、連隊旗を先導して入場し式場中央で部隊に正対する。これに対し部隊は「頭右」の敬礼をする。

## 観閲官臨場

## 観閲官に敬礼

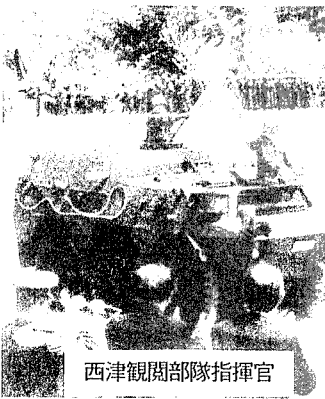
観閲官が臨場し、随行するように乗用車、小型バスで多数の来賓も来場し席に着く。そして観閲官に敬礼、国旗に対する敬礼、巡閲などの後観閲官の式辞があった。式辞の内容は、要職にある人を初めとして来場した方々への感謝、日頃の部隊への協力の感謝に始まった。強調された下りがあった。益々多様化する国際情勢の中で、如何なる任務にも対応出来るよう自分を先



15m/sの強風と闘う渡邊旗手

頭に励もうと云う隊員諸官への呼びかけである。来賓祝辞に共通していたのは災害等に於ける自衛隊への期待であった。

この間風は益々強く、荒れ狂っているという状態であった。この風は特に連隊旗旗手を直撃した。厚手の布地で作られた連隊旗が風速15m/sを超す風ではらんで一杯にはためく時、旗手が感じる重さは並大抵ではない。通常旗手は両踵を付けて起立する。だが猛烈な風の中で、二本をねじ込みで繋いだ旗竿が継ぎ目で折れる寸前と感ずるほど曲がっていた。旗手は臨機の姿勢で片方を手で旗竿の下を握り片方の手で上を握っていた。やや足を前後に開き膝を曲げ腰を落とし連隊旗を捧げ持ち続けている。それが崩れた感じは少しもなく、むしろ風に敢然と立ち向かう姿に見えていた。その姿に惹きつけられて、筆者の近くにいた場内整理の女性



西津観閲部隊指揮官

自衛官に旗手の名前を尋ねた。「渡邊忍1曹です」やや間を於いて小さく付け加えられた。「私の主人です」。その一言だけだったが、「連隊旗を落とさないで……」「神様……風を止めて下さい」——その女性自衛官が旗手を見続ける心を想像できた。筆者は観客の人混みをかき分け観閲行進発起位置に移動してきた旗手に駆け寄った。長い間の筋力緊張のためか、顔は青ざめて見えた。だが高い指揮通信車上に引き締まった顔で立つ観閲部隊指揮官も旗手も共に厳しい近寄り難い雰囲気か漂っていた。

行進は先ず音楽隊、音楽隊が演奏定位置についた後、指揮通信車搭乗の観閲指揮官に続いて3コ普通科中隊と新隊員教育隊が徒歩で行進し、続いて車両化された第1中隊を初め各種連隊装備の車両部隊が行進したが、いずれも担当隊区の市や町のシンボルマークを染め抜いた旗を掲げていた。この旗に對して手を振り或いは、歓声を挙げる観客の姿が印象的であった。更に支援に参じた戦車・火炮が続き、最後に明野駐屯地からの航空機が上空を通過し観閲行進は終わった。その後同じ場所各種展示や、車両の体験搭乗等が行われた。

## 創立記念会食

式典が終わってすぐ隊舎地区に移動



隊区内各市町村旗が揃う

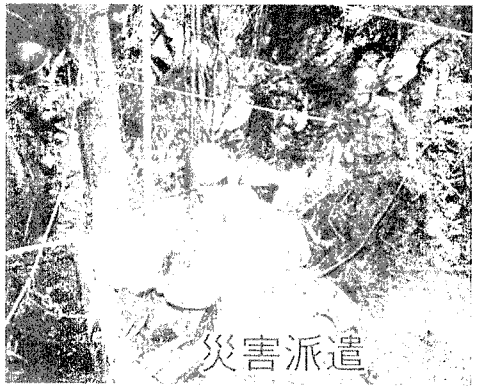
した。部隊が装備する武器車両などの展示場、戯れる子供達のための広場、趣向を凝らした野外売店等を急ぎ見ながら祝賀会会場へ向かった。この祝賀会食主催は部隊ではなく、三重県中勢防衛協会である。下世話な話になるが、これは祝賀会食の経費を官庁会計と別個の経理で行っていることを意味する。部隊は、調理と配食、他の飾り付けを担当する。準備が出来たテーブルの上は想像を超える豊かな皿が並んでいる。部隊の調理員は「ここが腕の見せ所」と何日も考えて準備をする由、皿盛りも匂いも十分に食欲を誘っていた。

会場は、バスケットコート2面をとっても余裕がある広さで既に出席者

で一杯、奥に広い舞台があり、太鼓と樽酒と市旗・町旗が並んでいた。会食は中勢防衛協会長代理庄山源一氏の挨拶で始まり、次いで駐屯地司令の御礼の言葉があった。その中で隊員に呼びかける下りがあった「今後どのような任務に就くか分からない。口頃から家族に自分の考えを伝えるよう啓発したい」。勿論敢然と任務に邁進する覚悟のことであろう。聞いた筆者は一瞬姿勢を正した。司令以下隊員諸官の厳粛な覚悟を垣間見た気がしたからである。

プログラムは進み、鏡開き、乾杯と進んだ。その間、来賓との挨拶交歓に忙しい駐屯地司令に瞬時お話を伺った。挨拶の内容に触れてみた。司令のお考えの中にはあらゆる厳しい事態への覚悟が窺えた。引き続きひたすら取材を続けた。三重地方協力本部長藤田稔1佐陸自81は連隊の災害派遣実績を高く評価し、三重県偕行会長渡邊忠綱氏60期は歩兵第33聯隊以来の部隊に寄せる思いを述べ、他に副連隊長、駐屯地最先任曹長や幾人かの町会議員から話を伺った。紙数がないのが残念である。出席者は互いに談笑を交わし、肩をたたき合い、握手をしている姿が随所に見られ、談笑が続く中、時間は過ぎ去り、万歳三唱の後、見送りの司令以下首脳陣に挨拶しながら人々は部隊

を後にし始めた。祭の余韻は未だ強く残り、正門の混雑を整理する警察官の姿があった。



災害派遣

この創立記念日に臨んで、特に先輩諸兄に、陸上自衛隊久居駐屯地は陸軍久居兵営の歴史を心の底にしつかり受け継いでいると感じた事をお伝えしたいと思う。その一は数年前の創立記念日には協賛の方々が「創立百周年記念」の名を使われていたこと、その二は現在の連隊長が第何代目であるかを数えるにあたりその初代を明治29年9月就任の歩兵第33聯隊長島村中佐として、そこから教えている資料があったことである。駐屯地を守る諸官には、歴史は途切れていないのだ。更にこの篇幅成後の5月10日、三重県戦没者合祀碑顕彰会主催の慰霊祭に個人の資格

ながら自衛官多数が参列したことを知った。これが現在の情勢で出来る限界なのだ。よくぞ参列して頂いたものだと感謝の他はない。敬虔な祈りが捧げられたことであろう。だが筆者は考える。欧米諸国やロシア・中国などならば最寄りの部隊から儀仗隊が派遣されて弔銃が捧げられ、部隊長は長年の国防への貢献の功績を示す勲章を胸に着けて花束を捧げる事であろう。何故日本ではできないのか。

今回駐屯地記念日の多忙な日に取材させて頂いた駐屯地司令、駐屯地広報信田准尉他の皆様にお礼を申し上げます。また靖国偕行文庫所蔵の「歩兵33聯隊史」から多くの知識を得たことを付記したい。

文責 松村興延 陸自64



将校集会所跡